

エリー・フォールの『古代美術』誕生

妻に宛てたギリシア・イタリア便り

篠塚千恵子

はじめに

ここ最近、フランスの美術批評家エリー・フォール（1873 - 1937年）の『美術史』四部作の第一作《古代美術》の翻訳にかかづらってきた⁽¹⁾。宣伝めいて恐縮だが、ようやく上梓の時を間近に控えて訳者あとがきを草するためいろいろと調べているうちに、《古代美術》執筆の契機の一つとなったのが、1906年にフォールが母を伴って旅したギリシアでの体験であることが明らかになった。約1ヶ月間かけて初めてギリシアとイタリアを巡ったこの旅行のあいだ、彼はあたかも日記をつけるかのように自身が見聞き感動した事柄を詳細に認めた手紙を妻に宛てて送っている。その手紙のうち9通が、1964年に刊行された大部の『エリー・フォール全集』全3巻のうち第3巻《雑著》に収録されている⁽²⁾。1909年に初版の出た《古代美術》はラスコーの洞窟壁画などの先史美術に始まり、エジプト、メソポタミア（新シュメール時代からアッシリアを経てペルシアまで）、ギリシア、ローマ美術までを扱っているが、他はすべて1章ずつなのに、ギリシア美術だけには「ギリシア美術の源流」、「フェイディアス」、「人間の黄昏」、「ギリシアの民衆美術」と四章も割いている。ギリシア美術にこのように異例の位置を与えたことに対して、フォールは初版を出すか出さないかのうちに後悔し、以後何度となく改訂を試みながら結局死を迎えるまでこれらの章はほとんど手つかずのままに終わった⁽³⁾。

フォールは《古代美術》、《中世美術》（1911年）、《ルネサンス美術》（1914年）、《近代美術》（1920年）の各巻からなる『美術史』を自身の代表作と自ら評価し、終生愛着を示して、晩年には反ファシズムの闘士として精力的に活動する傍ら着々とその改訂決定版を準備しつつあった。決定版の^{かなめ}要が《古代美術》にあったことは彼の友人、知人に宛てた幾通かの手紙から容易にみ

とれる。『美術史』の英語版（1921年）の翻訳だけでなくその出版の実現にも尽力した友人ウォルター・パッチに彼はこんな風に語っている 「 私は相変わらず第一巻が気に入りません。残りの巻に比べるとずいぶんとさもしいプランのもとに構想したものです。私はこの作品を15年くらい経ったら完全に書き直そうという考えを温めています。私の死後、私の書いたもので何かが残るとしたら、それはこの作品とその結論をもたらすべき作品、『形態の精神』でなくてはなりません 」⁽⁴⁾。「私の死後、私の書いたもので何かが残るとしたら、それはこの作品」とは、すなわち、直接には《古代美術》を指しながら、どうやらこれによって『美術史』全体を代表させているように読みとれる。それほど《古代美術》は彼にとって重い意味をもっていた。気に入らないといいながら、その修正にはちょっとやそとの時間では不可能であり、15年間くらいはかかりそうだと、この1921年の手紙に予告されているが、結局15年では足りなかった。気に入らない理由は明白で、それは先に述べたとおり、他の古代美術に比しギリシア美術に並はずれて大きな位置を与え過ぎたからであった。だが、15年経ってもギリシア美術の位置に修正のメスを入れられなかったのには深い（おそらく彼自身はそれほどとは予測してはいなかったであろう）理由があった。それは一言でいうならフォールが青春時代の終わり頃ギリシア美術の虜となり、その愛を生涯にわたって遂に捨てきれなかったからであった。そもそも彼の美術批評家としての出発点はクレマンソーの新聞として有名な『オーロール（曙）』紙に載せた「パルテノンと理想」と題した1902年8月1日の記事であったという⁽⁵⁾。これはフォールがロンドンの大英博物館でパルテノン神殿の彫刻 いわゆるエルギン・マーブル を見て魅せられた体験を帰国してすぐにまとめた記事だった。この頃からすでに彼の胸のうちには《古代美術》の、ひいては『美術史』の構想が湧いていたらしい。というのも、やはり1921年の、スイスの芸術評論家エマニュエル・ビュアンゾに宛てた手紙のなかで「この本は20年前に構想が湧き、それから5年を経たから書かれたものなのです」と語っているからである⁽⁶⁾。そしてこの構想を確固たるものにしたと考えられるのが1906年のギリシア旅行であった。

翻訳を終えての「あとがき」で筆者は、エリー・フォール没後50周年を記念して出された全5巻の『美術史』に付されたM.シャトラン＝クルトワの周到綿密な解題⁽⁷⁾を頼りに、そこに頻繁に引用されているフォールの手紙を部分的

に訳出しながら《古代美術》成立の経緯を明らかにしようとした。学生時代に《古代美術》を齧ったのみで、フォールの著作のよき読み手でもなければ、彼の研究者でもなかった筆者はそこで初めてフォールの人となりを知った。医師として身を立て、生涯医師としての肩書きを捨てることなく、美術史や美術理論については大学で専門に学んだことのない独学の人。ドレフュス事件を皮切りに若い頃から政治に関心を寄せ、無政府主義から共産主義へと思想遍歴し、『オーロール』紙や『ユマニテ』紙など左翼系新聞の美術欄に精力的に寄稿、晩年は人民戦線に参加してスペインにも赴いたまさに「アンガージュマン」を地でいった美術批評家。先史美術からルノワール、セザンヌ、ピカソまで、西洋だけでなく、インド、中国、日本、アフリカ、中南米美術にまで縦横無尽に走破し、ラマルクの進化論に裏打ちされた独特の汎生命論的哲学でもって「美術の歴史」をうたいあげた「万有の詩人」。建築や映画にも評論の対象を広げ、マルロー、ルネ・ユイグなどフランス国内の美術史家のみならず、ヘンリー・ミラー、チャールズ・チャップリンにいたるまで影響を及ぼした多彩な評論家⁽⁸⁾。そうしたフォールの美の思想の原点がパルテノン彫刻にあり、《古代美術》執筆の原動力となったのがギリシア旅行であったことを知り、そしてさらにフォールがこのギリシア美術への愛のために結局のところ生涯を通じてこの著作から離れられなかったことを知るに及んで、ギリシア美術史を研究する者として筆者は曰く言い難い親しみと感慨を禁じ得なかった。

「あとがき」ではこのギリシア旅行中に妻に宛てた手紙をしばしば引用したが、訳出したのは断るまでもなく《古代美術》成立の経緯を明らかにするうえで必要最小限度の部分にすぎない。しかし憧れのギリシア・イタリアの旅での見聞、体験を気兼ねなく妻に綴った、旺盛な好奇心とやわらかな感受性に充ちみちた33歳のフォールの手紙は何とも初々しく、新鮮な感動に溢れており、全訳したい気持ちに誘われること頻りであった。今この『地中海研究所紀要』第一号にその全訳を載せるのは、まことに勝手な個人的動機から発するとはいえ、エリー・フォールの《古代美術》成立の経緯をより深く理解するうえからもまんざら無益ではないであろうし、また今からおよそ1世紀前にフランスの新進気鋭の美術批評家が書簡体で綴ったギリシア・イタリア美術紀行文としても読むに値するのではないかと思われる。書簡体で綴った美術紀行文として筆者がすぐに思い出すのは和辻哲郎の『イタリア古寺巡礼』である⁽⁹⁾。これは当時京都

大学助教授であった和辻哲郎が文部省の海外留学生として1927年2月から翌年の7月までヨーロッパで過ごしたあいだ、3ヶ月半近くの時間をかけてイタリアを旅しながら日本で待つ妻に宛てて書き送った手紙を核として、それに手直しを入れたり、説明や感想を加えたりして一本にまとめたものである。和辻39歳、対するフォールは33歳の時の旅であるが、妻に宛てた書簡である点といい、ギリシア美術への傾倒という点でも両者には共通した点が少なくない。高階秀爾氏は『イタリア古寺巡礼』文庫版の解説⁽¹⁰⁾のなかで、「文章を綴るといことは、たとえそれが匆々の間に認められたものであっても、過去の体験の反省であり、自己自身との対話である。印象はただの印象だけにとどまらず、精神を通過することによってひとつの明確なかたちを与えられる。もしそれが、鋭敏な感受性とたくましい知的構想力を備えた精神であるなら、旅の報告も見事な芸術論、文化論になり得るだろう」と述べておられるが、この言葉はエリー・フォールの妻に宛てた書簡にも当てはまるのではないだろうか。エリー・フォールにとってこの旅はいわば19世紀ヨーロッパ知識人が行うのを常とした「グランド・ツアー」、ないし自らの美の思想形成の旅であった。

エリー・フォールの妻に宛てたギリシア・イタリア便り

1. アテネにて(1906年4月2日)[72]⁽¹¹⁾

妻よ、明日こそは遂におまえたちのニュースが得られんことを！音沙汰の無いのが僕にはとても耐え難くなり始めているのだ、電報が届いていないという事実はいくら僕を安堵させてくれるとしてもだ。いずれにしても健康でさえいればよい。僕にはおまえたちとのうちとけた生活が必要なのだ。

残念ながら僕たちの到着の日は天候に恵まれなかった。山々は雪と霧に覆われていたが、船が着き、海の向こうにパルテノン神殿が突然現れたときには強い感動に襲われた。アテネに入ってから、われわれは二流だが良いホテルに落ち着けて素晴らしい第一夜を過ごした。今朝、夜が明けるとすぐわれわれはアクロポリスを這い登った。帰ったらおまえに僕の感動を肉声でもっと長々と話すつもりだ。僕は優れた作家たちがよくいうあの幻滅を全然感じなかった。むしろしだいに大きくなっていく哀しみが少しずつ僕の感情と崇敬の情を領していくのを感じた、それは廃墟のためというよりはいうにいわれぬ喪失感のためだった。切り裂かれたパルテノンは心が引きちぎられるほどの輝きを放ってい

る。今朝の天気は雲がかかっていたが、夕方、母を疲れさせないために僕は一人でプニクス（Pnyx）の丘へ登り、沈もうとする太陽が放つ金色の溢れる液体に浸かったパルテノン（Parthenon）をそこから眺めた。どんなに光り輝いていたことだろう、神殿と彫像でおおわれた前5世紀のあのアテネは！

プニクス（Pnyx）の丘にいるのは僕一人だけだった。僕の前には、パルテノン（Parthenon）神殿とプロピュライア（Propylaea）とエレクトイオン（Erechtheion）、下方には、左にテセウス（Theseus）神殿⁽¹²⁾。その後雪におおわれた山々 ヒュメツトス山（Hymettos）、ペンテリコン山（Pentelicon）、パルネス山（Parnes） が半円を描いている。帰り道にはピレウス港（Piraeus）が見えた、海も、サラミス島もその停泊地も、アイギナ島も。僕はたった一人で、地上で最も輝かしい地点にいた。僕はほとんど怖くなった、僕は逃げだして泣きたい気持ちになった。われわれはいつあの民族がかくも偉大にした生命への信頼を再び見出すのだろうか？

次から次へと考えが群をなして僕を襲った。今朝、僕は大きな記事にすることができそうな素材を拾い集めた、たぶん一冊の書物の胚を。嗚呼！もし僕に努力する力があるのだったなら！すべてが言われなければならない、すべてが それでも僕は何も言わないだろう。

母はとても元気だ、ちょっと鼻風邪気味だけれど、実にけなげに歩くし、それにとっても芸術的センスがある。彼女は一直線に美しいもの、真に美しいものへ向かっていく。彼女が見るのは常にてっぺんだ。僕は彼女に芸術的センスがあることは知っていた、でもこれほどだとは知らなかった。彼女は素晴らしく発達した彫塑感覚を持っている。

現代ギリシア人は古代ギリシア人に似ている、適応性を除けばだが。彼らは目下のところ日曜日に行われる選挙と未来のオリンピック競技にしか関心が無い。政治とスポーツだ。泥棒がいるかって？たぶん、いるだろうが、これまでのところ僕は目にすることがない。彼らはインテリだ。疑いもなく。それも驚くほどのインテリだ。しかし、見たとおり、2000年ものあいだ同化できなかった文明と隷属状態の犠牲者たちであることに変わりはない。結局のところは未来だ それに彼らはあまり高く上ったので転落がきわめて深いところまで達してしまった。

明日、われわれは博物館に行くつもりだ。アクロポリス美術館はもう見た、彩色されたアルカイック（Archaic）の素晴らしい彫像や泣きたくなるくらい美しい「サンダルを履くニケ」⁽¹³⁾がある。他にもたくさんのものがある。

寝るとしよう。夜が更けた、僕のこの一日は骨が折れた。母はすでに2時間前から眠っている。

愛する家族四人すべてに
エリー

2. アテネにて [73]

妻よ、ゆっくり書いている時間がないのだが、一言も僕からの言葉をもたせずにこの配達便を出発させたくないと思ってね。われわれは今日スーニオン岬に出かけ、そこから「青く金色に輝くキュクラデス諸島が現れる」のを見た。比較的良い天気、強い風があったが、薄緑色の空は澄みわたり、軽やかで繊細、その下に藍色の海、そして空と海のあいだにモーヴ色の岬が横たわっている。われわれはアテナ神殿⁽¹⁴⁾のいたましい廃墟を見た、パルテノンが太陽によって黄金色に染まっているのと同じように海からの風によって白くなった廃墟。

昨日は博物館を見たが、美しいものがたくさんあった。とりわけ僕の感動を誘ったのはアクロポリスで発見された横たわるニュンフェの像だった。ミュケナイの宝物もあったが、これらは僕には資料的関心しか呼び起こさない。アルカイックの何体かの彫像に美しいタナグラ人形（ルーヴルにあるものほど美しくはないが）もあった。結局のところ、この博物館はアクロポリス美術館ほど見応えがない。アクロポリスには明日再び登るつもりだ。

今晚、夕食の後で、われわれは街でトリクフィスト Tricoufiste 派⁽¹⁵⁾のための政治デモを見た。強烈な騒音、怒号、歌、団体旗、オリーブの枝でおおわれた代議士の肖像、ベンガル花火、のろしなど キモン派とペリクレス派が対立していた時代も明らかにこんな風に行われていたにちがいない。

3. アテネにて (4月7日) [74]

妻よ、あわただしいのにもかかわらずおまえに手紙を書きたいと思ったのは今から10年前の今日、僕たちが結婚したのを、そしてこの10年ものあいだおまえにどんな些細なことでも咎め立てたいと思うようなことがこれっぽちもなかったことを考えたからなのだ。君も僕に対してそうだとよいのだがね。僕たちは怖ろしい不幸を経験した⁽¹⁶⁾、たくさんの心配事、多くのいざこざを経験したが、結局のところ僕たちの絆はますます強くなりつつある。そして僕た

ちの今の生活はたぶん完璧に幸福とまではいかないにしても、少なくとも平安に流れている。僕たちが一緒に経験した喜びと苦悩に免じて僕のエゴイズムと無関心を許してくれるようおまえに願います。

夕暮れ、僕はパルテノン神殿に別れを告げるためにプニュクス（プニクス）の丘に登った。天気は昼間の輝きの後、穏やかで、澄んでいた。北と西にベンテリコン山、パルネス山、南と東にヒュメツトス山、海、サラミス島とその停泊地、これらがあたかも無垢の冠のように壊れた宝石を取り巻いていた。今まさに没しようとする太陽がああ栄光に満ちた丘を燃え立たせていた、そして最初の月光の下で、パルテノンは少しずつ大きくなっていくように見えた。この地に到着して以来初めて僕はパルテノンの奥深くまで浸透した、僕たちはあたかも古い、古い友人でもあるかのように話し合った。泣きたくなるほど心地よかった。僕もまたアクロポリスを前にして再び戻ってこられるようにと無言で祈った。嗚呼！もし何ヶ月かここで生活できたなら、僕の詠嘆調癖と美文調癖は永久に直るだろう。この自然には厳格さと静けさがあり、何かしら観念イデーを与えずにはおかないものがひそんでいる。理解に達した瞬間に僕は去って行くのだ、何とも残念なことにもこんなにも早く、だがそれでも理解に達しただけでも幸福だ。

今日はギリシアの国祭日だ。王とその軍隊がわれわれの窓の下を通過していくのを見た後で、エレウシスへ向かった。そこではこの幸運な状況のためにわれわれだけだった。もはやそこには哀れを催す廃墟しかないが、環境は素晴らしい。戻ると、アテネは忌まわしい埃にまみれていた。

昨日、われわれはコロノス、アカデメイア、le Céphis（ケフィソス）⁽¹⁷⁾を訪れた。魅力に富んだ場所だが、ソフォクレスの時代以降衰退してしまった。

喧騒、ファンファーレ、ブラスバンド、鐘の音、爆竹、耳をつんざくようなどよめきが通りから上がってくる。選挙に国民の祭り、この土地のマルセイエーズ、オリーブの枝、そして竿につけてあちこち運ばれる弁護士の肖像。アテネの人々は愉しんでいる。

4 . パトラスにて (4月10日) [75]

妻よ、おまえの5日付けの手紙を受け取った。電報を受け取らなかったことに安心すると同時に心配もしている。考えてもみてくれ！今日は火曜だ、とするとフランソワ⁽¹⁸⁾に熱があるとおまえが書いてから5日経っているというこ

とだ。それで僕は自身に言い聞かせる、もし彼が良くなっているなら、彼女は僕を安心させるために電報で知らせてくるだろう、もし悪化しているとしても僕に知らせてよこすだろう、と。どう思うね？僕は少しく苦しんでいる。

われわれは陶醉と哀しみを交互に伴いながら旅を続けている。僕たちは日曜の朝アテネを発ったので、僕たちのいたホテルから二歩の所で前日殺し合いがあったことを伝え聞いただけだ。彼ら、ギリシア人たちは政治をしているときは元気がいい。アテネからわれわれはコリントスはただ通過するだけにとどめ、ミュケナイへ直行した、ものすごい風景のなかの禿鷲の巣窟、アイスキュロスが不朽のものにしたあの恐るべき殺人一家を収容するのに格好の場所へ。どうして僕はアイスキュロスを携えてこなかったのだろう。彼の本を読むべき場所はまさしくここだというのに、この恐るべき場所、不気味な岩山の上の、かの番人がそこで「天空に輝きわたり我が前で上っては沈む王たちが光り輝く」⁽¹⁹⁾のを見たという遙か遠くのと海と空と向き合って、あれらすべての殺戮が行われた場所。

そこから僕たちはコリントスへ立ち戻った。みじめで、汚れた、みすぼらしい人々の住む町、彼らの愚かしさがアテネ人の知性と極端なまに对照をなしている町。僕はここで蚤にむさぼり食われ、ぞっとするような一晩を過ごした。翌日は霧と雨の、いやな天気で、そのためにアクロ・コリントスに登ることができなかった。だが、かつて三十万の人口を誇ったこの古代都市の痛ましい廃墟を見に行くことはできた。いくらかの敷石、倒れた柱身、パルテノン神殿よりも200年も古いドーリス式の力強い神殿⁽²⁰⁾の遺跡。しかし、これらすべては何とパルテノンから遠いことか！嗚呼！パルテノンよ！

僕たちは案内書にも載っていないようなみすぼらしい小さな博物館を見学した。そこでは何体かの彫像の断片と片隅に埃をかぶっている、有名なものにちがいない素敵な小傑作を見ることができる。それはイルカに乗った裸の小さな子供の像だ。もはや頭も足も手も欠けているが、彫刻家がどのようにその小さなまるまるとした身体を肉付けたか、その優美さとその精神、その優しさ、僕という言葉の力では言い表せないようなものがそこに現れている。これを見たことが僕たちの陰気なコリントス訪問をそれだけで明るく照らしてくれる。

僕たちがコリントスへ戻ったのは正午に通るはずのデルフォイ行きの船を待つためだった。2時半になっても船は一隻たりとも来なかった。僕は英雄のよ

うな決断をした。僕たちは3時にパトラスへ向けて出発した、そこからデルフォイとオリュンピアへ行けるのではないかと望みをかけて。僕たちにとって幸運だったのは、汽車のなかでフランス語を少し話せるとても愛想のよい紳士に出会ったことだ。パトラスに到着するとすぐ、彼は素晴らしいホテルを教えてくれた。今そこからおまえに手紙を書いているのだが、僕の目の前には藍色の海にモーヴ色の山々の素晴らしい景色が見える。かの紳士は僕よりもフランス語をうまく話す彼の友人の一人を紹介してくれた。幸運にも！彼がいなかったら、デルフォイかオリュンピアのどちらかを諦めることを余儀なくされていただろう、もしそんなことになったらどんなに馬鹿げたこと、残念極まりない仕儀になっただろう。それでもどちらも見するためにはまだまだ途方もない戦術を編みださねばならなかったのだ。僕たちは今晚汽船でデルフォイへ出発する。だが金曜の夜までは帰りの船がないのだ。そうすると、土曜の夜に僕たちはプリンディシ行きの船に乗るから、オリュンピアを見る時間が無くなってしまおうだろう。それで、今度は僕の思いつきなのだが、小さな帆船でコリントス湾を渡り、イテア＝デルフォイの対岸のアクラタ（地図を見たまえ）⁽²¹⁾でパトラスとオリュンピア行きの汽車に乗ることを考えた。こうすれば、僕たちは木曜の夜オリュンピアに着き、金曜と土曜の朝に遺跡と博物館を見ることができよう。

パトラスへ戻ってきたらおまえの手紙が少なくとも一通は待っていることを願っている、そうすれば僕の心配はやわらぐだろう。天候は回復しそうだ、今日は素晴らしい天気だ。明日もデルフォイでこんな風だとよいのだが。

僕の代わりに子供たちを抱き締めておくれ、とくに僕たちの可愛い病人を。そしておまえの優しい忠実なる友を信じておくれ。

エリー

5. 「ボスニア」号の船上で（4月15日）[76]

妻よ、僕はもう5日もの長きにわたって何の音沙汰も得られないまま過ごしている。おまえがフランソワについて知らせてくれた最後の便りでも僕はあまり心安らかになれず、しばらく居心地の悪い状態で過ごした。幸いにも、昨晚、船に乗ろうかという時に2通の手紙を見出した。郵便局に見に行ったら本当によかった。というのも、僕がデルフォイとオリュンピアに滞在しているあいだこの役目を頼んでおいたホテルのボーイたちが何も届いていないと僕にうけあ

たからだ。僕は同時に僕たちに会いに来ることを決めたというミミ⁽²²⁾の伝言ももらった。僕たちはヴェズヴィオ山から鳴り物入りの歓迎を受けることになるだろうよ。あの大天災によって不幸と悲哀のどん底に陥れられたすべての哀れな人々のことを考えなければまったく喜ばしいことだ。

僕たちのギリシア滞在最後の4日間は実に波乱に富んだものだった。おまえも知っているように、僕はデルフォイかオリュンピアのどちらかを見られないのではないかと怖れていた。僕たちは両方を見ることに成功したんだ、まんまとね、精力と勇気、少なくとも母からすれば、のあらん限りを発揮してね。

火曜の夕方、パトラスにいたときはイテア（デルフォイの港だ、地図を見たまえ）行きのをれわれの船の出発に未だあまり確信が持てなかった。船は9時出発とアナウンスがあったが、船が来たのはようやく朝の2時になってからだった。それで僕は窓辺で待つこと5時間を過ごした。そのため鼻風邪をひいたが、僕のいつものやり方で、今日の夜には吹き払った。

こうして僕たちはこの船に乗ったが、船は小さく、汚く、投票に出かけた島からの帰りの人々でいっぱいだった。母はベンチで眠り、僕はテーブルに肘をついていた。これでも1等なのだ。朝9時頃、陽の輝やくときに、僕たちはイテアに到着した。そこでドイツの大学の好感のもてる物理学の教授とその夫人と一緒に車に乗り、デルフォイには正午頃着いた。僕が帰ったらこの風景の素晴らしさを、壮大な山並みを背景にして神殿や劇場やスタディオンがひな壇式に配置されている有様を詳細におまえに語ってあげよう。この風景の荒々しさと同時に豊かさ、そして堂々とした厳格さは言葉には表し尽くせない。ここにはまたとてもよい博物館があり、発掘のすべての精華が収められている。「御者」⁽²³⁾、リュシッポスの運動競技者、鋳型がルーヴルの「サモトラケのニケ」の近くにある馬など。素晴らしい天候に恵まれ、それなくしてはデルフォイを見ようとするのは無益と思われるほどだ。

帰りが大問題だった。船は金曜の夜しか通ってはず、これは僕たちがオリュンピアを見て土曜に乗船しようとするにはあまりに遅すぎた。僕は連れのドイツ人たちにコリントス湾をボートで渡ることを提案した。彼らは大いに迷った末に受け容れた。それもこれもホテルの主人がこの企ては分別がないとわれわれに断言したからだった。僕は全員を引きずり込むために力説した。最も強固に反対した母も遂に説得させられた。早朝イテアに戻り、イテアの対岸のアク

ラタ（地図を見たまえ）までわれわれを乗せていってくれるボートをチャーターするのが問題だった。アクラタでわれわれはオリュンピアに向けて1時の汽車に乗り込むつもりだった。

それで、僕は全員を引きずり込んだ、母は僕なしで戻るよりは僕と一緒に死んだほうがましだと宣言した。そこで僕たちは素晴らしい航海をした、海の美しさはもはや描写しがたいほどで、われわれが向かっていく方向にはモーヴ色の山々が続いており、われわれがやってきた側の山々は黄金色に染まり、しだいに金色に焼けていった。するとあたかも精神が立ち現れたかのように白く輝くパルナツス山が軽やかな紺青のなかに突然出現するのだった。湾の真ん中にいるとき、人は金のはめ込まれた巨大なサファイアの中心にいるような気分になるだろう。不運にも あるいはむしろ幸運にもというべきか！ そよとの風すらなかった。それで航海はほとんどオールでなされた。我らが3人の哀れな悪党どもはたっぷり25フランとわれわれが足した心づけの5フランを稼いだ。彼らはわれわれの機嫌の悪いのを怖れていた。というのもこの航海が**6時間以上も**かかったためわれわれは最初の汽車に乗りそこねてしまったからだ。われわれはやっと5時の汽車に乗りこみ、パトラスに一夜を明かすために戻って、そこから金曜の朝オリュンピアに向けて出発した。われわれはだからオリュンピアを見るために金曜の午後と土曜の午前を全部使うことができたわけだ。それで多すぎるということはない。

オリュンピアもまた大変美しい風景のなかにある。むろん壮大さにおいてデルフォイに劣るとはいえ、それでも絵のように美しく、眼を愉ませてくれ、それなりに厳格で、プッサンの絵のように高貴だ。遺跡はほとんどまったく興味を惹かず、デルフォイには遠く及ばないが、その代わり、博物館の方はおそらく人類の美術の最高峰を収蔵している。それは造形表現におけるアイスキュロスの三部作悲劇に対応するものだ。ケンタウロス族とラピタイ族の争いは男が発情し酩酊したときのように暴力的で、基本元素のように静かで、中央の人物のアポロンは海から現れる太陽の厳しさと勢いをもって破風から溢れ出る。プラクシテレスの哀れなヘルメス⁽²⁴⁾の方がずっと有名なのだが、これはその脇に置くとテノール歌手のように見える。非常に異なった精神の産物だ、たしかに魅力的で凝っていて、冴えた腕前で、気の利いた、人間的な作品だが、信仰は失われている。まさしく、アイスキュロスからエウリピデスを分かつ相違だ。

フェイディアスより優っているだろうか？どちらに軍配を与えたらよいか僕にはその勇気がない。アルカメネスのオリュンピアの破風⁽²⁵⁾について、フェイディアスのパルテノンの破風について、時代と状況に即して考える必要がある。だが迷うことが許されるのはただこれら二つのあいだにおいてのみだ。

いずれにせよ、年代的には、旅はオリュンピアから始めるべきで、旅のしめくくりはアテネであるべきだ。この破風は例外だ。もう一方の側の破風は凡作だ⁽²⁶⁾。全体的に見るなら、パルテノンの方が優り、アテネは精神の揺籃期にある人間たちの至高の巡礼地であり続けるべきだ。僕たちがギリシアに戻ってくるとき 何故って僕たちはここへ戻ってくるのだから 僕たちはオリュンピアから入り、続いてデルフォイに行き、最後にアテネに行くことにしよう。僕は逆回りをした。でも僕はそれを後悔してはいない。何故なら、この逆回りの旅程は真の旅程がどうあるべきかを僕に開示してくれたのだから。

昨晚パトラスで乗船。今朝、コルフ島に到着、古い城塞と緑の鎧戸のある薔薇色の家並みに見下ろされた広い港への素晴らしい到着。大砲、軍旗、音楽。エドワードと全イギリス艦隊がそこにいた。船上で出会ったコンスタンティノーブルからの旅行客の親切のおかげで、僕たちは上陸してコルフ島の内陸まで入り、車で町の周囲を、巨大なオリーブ林やレモンの木々、ジェラニウムや薔薇の植え込みを見て回った。陶酔のひととき。

今晚、僕は西の地平線に赤みがかかった黒いヴェズヴィオ山の姿を見ながらおまえに手紙を書いている。

以上が僕たちの冒険旅行^{オデュッセイア}の次第だ。この冒険旅行はなかなか面白い、それをおまえはきっと実地に確かめることができるよ。

6 . ナポリにて (4月18日水曜日の夕方) [77]

妻よ、おまえが僕の手紙の回数が少ないといって非難するのが僕にはよく理解できない。僕は僕のできる限り頻繁におまえに便りをしているつもりだが、もしかするとギリシアから不定期にしか手紙がおまえのもとに届かないのなら、それは郵送便が少ないせいだ。時として一回欠けることもあるから、待つこと4日間。それで結局、2, 3通まとまっておまえたちのもとへ届くというわけだ。

さてご覧の通り僕たちは今イタリアの地にいる。プリンディシからナポリま

での旅は長く、とても疲れるものだった。月曜はまる一日汽車の中はひどく暑かったし、バジリカータの引きちぎれたような、荒々しい、壮大だがおそろしく単調な山脈を越える時間は長かった。僕たちは8時半にバッチェパリアに着いた。そこでミミに会えると思っていた、彼女が電報であらかじめ知らせてきていたのでね。だがミミの影すらなかった（彼女は僕がこの手紙を書き始めたときに到着した、幸せそうで、元気いっぱいだ！）。さて、ミミはいなかった。駅で見つけた少年が僕たちのために宿屋を見つけてやると言ってきかなかった。3回か4回かの空しい試みの後で、われわれは家族も動物も一緒くたになったぞっとするような家に転がり込んだ。そこから梯子が一階へ通じていて、いくぶんましな部屋があった。彼らは僕たちを歓待するためにミュージックボックスをかけさせ、2台のベッドにレースの敷布をかけてくれた。母は僕が背を向けているあいだに着替えをし、僕たちは僕たちに当然支払われるべき休息を眠りのなかに見出すべき準備をした。何しろ鉄道でのあのよう長い道中を経験し、そして船中で芳しくない2晩を明かした後なのだから。

何という夜だったろう！僕は死の敷居までバッチェパリアを忘れないだろう。**僕は1分たりとも眠れなかった。**母は3、4時間は休むことができたのだからまだ幸せというものだ。僕といえば、一分すらできなかったのだ。20匹やそこらは虫どもを殺しただろう。蚤や南京虫の類だ、とくに蚤は大きく、ふわりとして生気がなくせに獰猛なのだ。だが、三千の敵に対してどうすればよいというのだ？ 怖ろしい夜！朝4時に僕はぼろぼろになって新鮮な空気を窓辺で少しばかり吸うために起きあがった。僕たちは5時には駅にいた、そこでミミに会えるのではないかと期待して。だが相変わらずミミは現れなかった。ぼろぼろになって、僕たちはパエストゥムに向けて出発した。そこで僕たちは神殿巡りをした。ネプトゥヌス神殿、この大いなる神殿はずんぐりした力強さに満ちていて素晴らしい。さながら歩む獣といったところだ。パルテノンより100年も古いというのにほとんど無傷だ⁽²⁷⁾。だが、ここにはあの神聖な丘の連なりもアクロポリスという台座も欠けている。

正午、僕たちはポンペイにいた、相変わらずミミにそこで会えるのではないかと期待しながら。素晴らしい湾の縁に位置する小ナポリといでもいうべきサレルノから僕たちは噴火地帯に入っていくことになる。いたるところに大地、家々、樹木、耕作地があり、人々は灰色の灰で化粧したみたいだ。

灰の下のポンペイとぐいと張り出したヴェズヴィオ山を見た。この山は恐ろしくも壮麗だった。一種くすんでいると同時に輝く白の円錐台、その上に生き生きと動く、彫刻されたかのような、驚くべき彫塑性に富んだ、煙と雲からなる巨大な銀の巡回する渦が載っている。おおブルデルよ⁽²⁸⁾、君はどうしてそこにいなかったのだ！大天使が空に彫刻したのだと、その作品が動いたのだと人は言うかもしれない。この怪物は恐ろしいほど生命と激しい静けさに満ちている。

ポンペイで車に乗って溶岩の河があるボスコトレカーセに行った。僕たちの足の下で火が激しく泡立ち、時々鶴嘴の一撃を加えると、燃えさかる火の心臓部に達した。火によって穴を開けられた家々、粉々になり蒸発した木々、それでも常に変わらずこの黒く銀色の怪物は動きに富み、静かで、今や間近に見ると、僕は登ってみたい気持ちに駆られた。

ようやくナポリにご帰還だ、灰におおわれたナポリにね。狂ったようにブラシをかけて、行水を浴びて、再び街へ降りていく。ナポリのこの素晴らしい街路は騒々しくて人なつっこく、せわしげでいてやる気がなさそうで、皆が互いに知り合いで、おまえたちも知っているかのようだ。何て素敵な都市なんだろう！今朝は水族館、今日の午後は博物館で彫刻の置かれたいくつかの室。それらの室で僕たちは素晴らしいものを見た。そして帰りがけにここで遂にミミに会えた、快活で血色がよい。僕たちはこれから再び街へ降りて行く、夕食と街の生活を味わうために。

愛情に満ちて。帰国は近い。僕が健康を見つけるのはここだと思う。ナポリにはたしかに神経衰弱は存在しない。ギリシアは落ち着かない、ギリシアは気を滅入らせる。ギリシアはその廃墟によって陰鬱であり、その崇高さによって気を挫く。生命！それしかない。ギリシアがかつてかくも偉大だったとしたら、それはギリシアがそのことを知っていたからだ。ナポリのにぎやかな通りで見つけたのは死せるパルテノンの美しさの理由だ。愛情をこめて。

今朝は灰の雨。僕たちは清潔だった！

ボスコトレカーセでピストルを盗まれた。

通りの向こう側の、屋根の壊れた市場がまさに僕たちの窓（トレド通りのHotel de l'Univers）の真ん前にある。

埃から眼を守るために僕は黒の鼻眼鏡を買った。

7. ローマにて(4月22日)[78]

妻よ、全然便りが無いのに僕は非常に驚いていると同時にとても心配している。今は日曜の夕方、そして水曜の朝、つまり僕たちがナポリに到着した翌日以来おまえから**何も**受け取っていないのだ。この音沙汰なしの唯一ありそうな理由は、おまえが一日遅れでナポリ宛てに僕に便りを寄こしたということだ。たぶん明日の朝には分かるだろう、ナポリの郵便局に僕宛ての郵便物をローマへ回してほしいと頼んだから。いずれにせよ、ゆうに5日間は音沙汰なしなので、僕はこれがとても長く感じている。

さて、僕たちは昨日の朝ナポリを発った、この強烈な都市の、ひとつの鮮やかな思い出を携えてね。この前出した手紙の後、僕は古代博物館を見学した、実に素晴らしい博物館だ、とりわけポンペイの絵画のおかげで。それから劇場で「トラヴィアータ」を聞いた。これらのイタリアの俳優はまったく驚嘆させられる。ミミが言うように、彼らは滑稽さを怖れない。彼らは概して滑稽だが、情熱的でドラマティックな場面になると、彼らの滑稽さは消えて、目を見張らせられるものになる。

出発の前日、ナポリ湾からヴェズヴィオ山を対岸に望むポジリッポ⁽²⁹⁾で昼食をとった。僕はひどく疲れていたのだから、おまえにこの眺望の素晴らしさを手紙に書くことができなかった。おまえと一緒にもう一度、もっとゆっくり眺めることができるよといのだが。

ローマは可能な限りナポリに似ていない。今や近代的一大首都だ、素晴らしく清潔で、電車が走り、豪華なホテル、大規模な店舗、信じがたいほどの活気、それでもローマはその特性の何ものも失っていない。昨晚、到着するとすぐ、われわれはサン・ピエトロ大聖堂へ行った、そして夕食を食べに行く前に、ジャンニコの丘に沈む太陽を見に行った。これは僕が予想していたとおりの力に溢れた厳格な都市、誇大妄想的で、怪物じみた都市だ。これは世界のなかで飼いやめた自然に人間が最も壮麗な配置を課した場所だ。石を敷きつめた街路、巨大な浴場、水が大きなしぶきをあげて絶え間なく流れるみごとな噴水、厳めしい庭園、単調な大宮殿、高所からも遠くからも単純で怪物のような、ずんぐりした四角い大規模な切石の列、そのあいだに水たまりのような黒い樹々の塊、パラソルを広げたような松の並木。われわれはそれらにメランコリックな魅力を感じた。幸運なことに。というのも廃墟の見学は、今日、われわれをもの

すごく失望させたからなのだ。失望させただって？いやいや、僕はこれを予期していた。ギリシアの神殿の後、これらすべてはまことに重厚で、非常に成り上がり者の感じがする。彼らがまさしく彼らなのは、きわめて偉大であるのは道路や闘技場、水道橋、浴場など実用建築においてでしかない。カラカラ浴場は想像を絶するほど力強い。パラティーノの丘は何かしら恐ろしいものを秘めている。

僕たちは非常に疲れた、ほとんど一日中腰をおろすことさえしなかったといえる。この手紙は夕食前に書いているのだが、僕たちは夕食をとったらすぐ床に就こうと思っている。この都心のホテルはコルソ通りが横切るコロンナ広場にある。ここはなるほどじゅうぶんこの現代都市の中心にある。おまえがまごつかないよういつも局留めで僕に便りを送ってくれたまえ。

再びサン・ピエトロ大聖堂を見た。怪物じみているのはローマの記念物にふさわしいが、実におぞましい、とくに内部は。ミケランジェロのモーゼも見た。恐るべきエネルギーの産物。だが、おお、「ケンタウロスとラピタイの闘い」よ、汝はいずこにありや？飾り気のない丘にそびえるささやかなギリシアの神殿群よ、汝はいずこにありや？

明日は博物館をいくつか見る。

子供たちにキスを、そしておまえを愛し、おまえに忠実なる者を信じてくれ。

エリー

お願いだから便りをくれたまえ、2日ごとに、葉書一枚でよいから。

8 . ローマにて (4月25日) [79]

おまえは筆まめではないよ。今度もおまえの手紙はその前のから数えて6日目のもので、こんな言葉で始まっている、「あなたに何を言えばよいの？」僕に何を言えばよいかだって？でも、おまえたち全員、子供たちとおまえと、一刻も早く再会したいのだ、お願いだからこれを信じてくれ。

僕たちはここでは鼠のようにせかせか歩き回っている。そして僕たちはあまりに褒めそやされた作品のごったまぜの中にとても美しい花々を見出している。今日はヴァチカンの古代博物館、あの世界のうちで最も大きく、最も美しいと自称する博物館だ。僕はそこで質のよくないローマの彫像と二流のギリシア作品、とくにプラクシテレスのエコールのますます僕には飽き足らなくなる作品のぱっとしないコピーしか見なかった。一つきわめつきに美しい作品があった、

「ヘラクレスのトルソ」⁽³⁰⁾だ、いうまでもなくギリシアのもの。

その代わり、ヴァチカンほど有名ではないが、ローマ国立博物館にはゆうに4点ないし5点の傑作がある。「波から上がるウェヌス」は、僕は前から顔だけは知っていたが、実際に見てみるとずっと魅力がある。前5世紀ギリシアの素晴らしい「アポロン像」、「まどろむエリニュエスの像」、実に美しい「少女の像」、これらすべてはいうまでもなくギリシアのもので、ローマのものでは「女性像」に一点傑作がある⁽³¹⁾。もしローマ人がギリシア人を模倣しなかったなら、彼らはわれわれに彼らの建築と同じような、重厚で成熟した厳かな素晴らしいものを遺しただろう。だがこれらの牛どもは羚羊の優美さを自らに与えたがったのだ。それで…。このように、ローマの懐に入ってまでギリシアは僕を追いかける。ローマの懐に入ってまでもそれは君臨する、そしてその強烈な魅力が輝かしい勝利を得る。静かで強情な美しき花とでも言おうか、二つの石のあいだに成長しながら大きな壁を炸裂させる花とでも。嗚呼！アテネの後にローマを見るべきではない。

僕はローマと言ったのであって、イタリアと言ったのではない。昨日、ローマのミケランジェロは僕を恐れさせ窮屈な気持ちにさせた。それで僕はずっとあの小さなギリシアのウェヌスのことを考えていたのだが、イタリアのラファエッロは僕を征服した。何という自然さ、何という若々しくも純粋な優美さ、それでいて熟達した科学と成熟した理性。彼はカトリックの土地で道に迷ったギリシア人、すべてを、天国も地獄も、苦行者も審問官も、指で触れながら人間化していく。彼は絵画のモーツァルト、モーツァルトと同じような、力強くつつましやかな優美さを有している。彼は常にかくも熟練し、常にかくも若々しい。僕たちは再び古代ローマの遺跡の重々しい抱擁のもとにあった。ラファエッロは僕たちに自由を返してくれた。僕は僕たちがローマに到着してから初めて息をついた。

夕方はふつう僕たちは散歩している。一昨日の夕べはヴィッラ・ドーリア・パンフィリへ（ベラスケスの見事な作品、教皇の肖像画を見た）⁽³²⁾。これらの芝地の優美さと厳格さを表現する言葉が何も見つからない、そこには雌鹿、雄鹿が草を食^はみ、神秘的な黒い木立、苔におおわれた古い彫像の見下ろす下で枯れ葉で重くなった水面。昨日はローマの田園に行った。そこでは単調なメランコリーが僕を追いかけた。どうしておまえはそこにいないのか？可哀相な愛

する恋人よ、誓って約束する、おまえはこれらすべてを僕と一緒に見るだろう、僕がこの旅行を決めたとき願ったように、そして僕たちが結婚したとき計画したように。母とミミはいる、だが僕の妻ではない。告白するが、僕の一体感はおまえとなら遙かに申し分ないだろう、夜の肉体的な一体感を勘定に入れなくても。それは昼間の熱狂の知的一体感をまことに完璧なものにしはするが。

それではまた、妻よ。お願いだから、もう少し頻繁に便りしてくれたまえ。おまえはギリシアではそれほどけちけちしていなかった。

愛情こめて、おまえと子供たちにキスを。

エリー

9 .(4月30日月曜日夕方)[80]

妻よ、今はもう出発　そして帰国　の前日だ。僕はこの旅をして心から幸せだ、そしてまったく元気を回復したのを感じている、数年間は自分を強固に保つのに十分なほど強い思い出で精神は満たされている。だが、それ以上に帰国するのはうれしい、おまえたちみな、とりわけおまえが僕のこの長いリボンのような旅の道のりの先で僕を待っていてくれることを思うと、ね。おまえの愛しい、なくてはならない存在が恋しいのだ。明日の夜ジェノヴァで、あるいは明後日の夜マルセーユで電報が何かが届いてさえなければ、僕はニームに行って木曜を過ごし、金曜の朝8時半頃パリに着くだろう。(木曜におまえに電報で報せるつもりだ。)

こんな風に計画をたった1日だけ遅らすことにおまえが恨みがましく思うなんて僕は思わないよ。叔父とグロツ叔母を喜ばすと思うのだ、そしてニームの一日は、結局のところ、無駄な一日ではないだろう。

僕たちは最後の二日間を充分活用した、天気はひどかったがね。とくに今日は、雨が降り続けた。昨日は、ジョットが、今日はマサッチョが僕に啓示を与えてくれた、フィレンツェの魅力溢れる、いくぶん病的な庭園に咲く英雄的な二輪の花だ。これらすべての写真を僕は持って帰るが、写真はこれら美しきもののかなり間接的な観念しか与えてくれない、とりわけ Fresco 画に関しては。僕は何よりもそのたくさんの観念を持ち帰る、ジョットはたくさんの全般的なことを僕に開示してくれた、そしてたくさんのその他のことを確認させてくれた。彼は創始者という評価とは逆に、ひとつの結果なのだ。彼はフランスのゴシックに対応する内的業績のイタリアにおける開花なのだ。ルネサンスはまっ

たく彼の関与なくして、彼の開花から100年後になされたのだ。これについてはまた話すことにしよう。

明日は、僕たちはジェノヴァに立ち寄る代わりにピサで4, 5時間過ごしてベノッツォ・ゴッツォーリ⁽³³⁾を見るつもりだ。

それではさようなら、この手紙は明日僕たちを運ぶ汽車の中で投函しようと思う。おまえはこれをたぶん木曜の朝受け取るだろう。そして僕はその24時間後だ。

子供たちにキスを。

おまえのエル

昨日の晩「トルヴェール」を聴きに行ったが、実に素晴らしいことがあった。

注

- (1) Elie Faure, *Histoire de l'Art: L'Art antique* の翻訳であるが、その底本にしたのは、ジャン・ジャック・ボヴェール社から出されたエリー・フォール全集 *Oeuvres Complètes d'Elie Faure*, 3vols, Ed., Jean Jacques Pauvert, Paris, 1964 (以下、OCと略記) の第1巻『美術史I』に収録された《古代美術》。美術史家・美術批評家エリー・フォールの業績については高階秀爾著『美の思索家たち』(青土社1983年刊) pp.13-24; ウード・クルターマン著勝國興・高阪一治訳『美術史学の歴史』(中央公論美術出版1996年刊) p.310を参照。彼の人となりについては国書刊行会から2002年10月末に刊行される予定の(本紀要が出る頃にはすでに刊行されているはずである) 拙訳『古代美術』の「訳者あとがき」(以下「あとがき」と略記)でも触れているので参照されたい。なお、日本におけるエリー・フォールの著作の翻訳書としては古田幸男訳『約束の地を見つめて』(法政大学出版局1973年刊)を措いて筆者は寡聞にして知らない。
- (2) OC。この全集第1巻には、《古代美術》のほかに《中世美術》と《ルネサンス美術》が収録され、第2巻には『美術史II』として《近代美術》と《形態の精神》、第3巻には『雑著』として上記以外の著作や小説、雑誌などに発表した短文、さらには563通に及ぶ書簡がおさめられている。第3巻のなかで563通の書簡は1891年頃のものから彼の死の年である1937年まで年代順に通し番号がふられており、旅行中妻に宛てた9通の手紙は72番から80番まで(pp.977-981)である。
- (3) フォールのこの改訂の試みについては「あとがき」に詳しく述べているので、これを参照されたい。
- (4) OC, III p.1025 lettre 226
- (5) Elie Faure, *Histoire de l'Art: Preface et textes établis par Martine Chatelain-Courtois*, Denoël, Paris, 1985-1987 vol.I, Dossier pp.198-200 (以下、Denoëlと略記)。本書に付さ

れた M.シャトラン = クルトワによる緒言(Préface pp.9-21)と解題(Dossier pp.197-237)はまことに周到且つ緻密なもので、『古代美術』成立の経緯についての筆者の理解はこの解題に多くを負っている。なお、このシャトラン = クルトワの緒言と解題の存在については国書刊行会編集部の清水範之氏からご教示をいただき、さらにそのコピー資料まで頂戴した。このご教示なくしてはあのように長文の「あとがき」執筆も、ひいては本紀要にフォールの書簡の翻訳を思い立つこともなかったであろう。記して、氏に心からの感謝の意を捧げる。

(6) 1921年4月11日付けの手紙。OC,III p.1025 lettre 228 20年前というと1901年、それから5年というと1906年になるが、正確には19年前の1902年に構想が湧き、それから5年を経て書かれたものではないかと筆者は考える。エリー・フォールの記憶違いか、20年というきりのいい数字にしたのではないだろうか。というのも、1907年7月1日付けの実際の従兄弟モーリス・ルクリュに宛てた手紙(OC,III p.981 lettre 81)に、「僕の『美術史』の第一巻は準備が整った」とあり、この年には書かれていることがほぼ確実であり、1902年のロンドンでのパルテノン彫刻体験がフォールの『古代美術』執筆の構想の源だと筆者は確信に近い思いを抱いているからである。

(7) *Denoël*. 前注5を参照。

(8) アメリカの小説家ヘンリー・ミラーがフォールの『美術史』の熱烈な愛読者であったことは、OC 第一巻に寄せた「緒言」(拙訳『古代美術』の緒言を参照)を一読すれば明らかだが、ミラーの代表作『薔薇色の十字架』にもフォールの『美術史』への言及が見られる。また、チャールズ・チャップリンについては、フォールの著作がこの映画の喜劇王にどの程度の影響を与えたか筆者は審らかにしないのであるが、*Denoël*,I p.14(シャトラン = クルトワの「緒言」)には、インタビューを受ける際にチャップリンがインタビューアの教養を測る目安として「あなたはエリー・フォールを読んだかね?」とよく問いかけたものだったというエピソードが挙げられている。

(9) 和辻は夫人宛の手紙をこのイタリア旅行からおよそ20年後の1950年(昭和25年)に若干の手直しを加えて一本にまとめて刊行した(発行所は^{かなめ}愛書房)。筆者が目を通したのは1991年に発行された岩波文庫版である。

(10) 上掲書 pp.254-255

(11) []内の番号はOC,IIIに収録された書簡(pp.957-1137)の通し番号を示す。

(12) いうまでもなく、アゴラの西北の小高い丘コロノス・アゴライオスの上にそびえる、前5世紀後半の建立になるヘーファイストス神殿。この神殿を飾る北及び南メトープ彫刻の主題がアテネの英雄テセウスの冒険に取材したものであるため、長い間テセウス神殿と考えられていた。

(13) アテネのアクロポリス南西端に突き出た保塁、いわゆるニケ・ピュルゴスの上に建つアテナ・ニケ神殿の三方を囲むかのように大理石製の浮彫が施された欄干が前5世紀末に巡らされた。現在その欄干はないが、浮彫のいくつかが残っており、アクロポリス美術館に展示されている。ここでフォールが語っている「サンダルを履くニケ」(現在は通常「サ

ングルの紐を解くニケ」とされる)はなかでも最も有名なもので、頭部は失われているが、肩から衣がずり落ちて片肌があらわになったモチーフ、薄衣を透かしてくっきりと現れた肉体の美しさ、その起伏に富む肉体の上を波うつ髪を作る光と影によってバルテノン彫刻以降の代表的作品の一つに数えられる。

- (14) フォールがスニオン岬で見た神殿遺跡はいうまでもなくアテナ神殿ではなく、ポセイドン神殿のことである。スニオン岬先端の神殿は十数本の円柱が立ったままの状態が残っていたが、パウサニアスの『ギリシア案内記』の有名な冒頭の一節「ギリシア本土からキュクラデス諸島とエーゲ海にむかって突き出しているのがアッティカ地方のスニオン岬である。船旅でやって来てこの岬の沖合を過ぎると、まず港が、ついでその岬の頂きのアテナ・スニアスの神殿が見えてくる」(馬場恵二訳)によって19世紀末までアテナ・スニアス神殿だと信じられていた。しかし1899年に初めて Valerios Stais がここから発見された碑文に基づきポセイドン神殿であることを明らかにし、その後の研究から真のアテナ・スニアス神殿は岬の北東の低い丘にあったことがその礎石の一部から確認された。このアテナ神殿は前5世紀半ば過ぎに建立されたイオニア式神殿であったが、おそらくマケドニアのフィリッポス5世によって破壊された後、1世紀にその断片がアテネのアゴラに運ばれ、そこの神殿の建築部材として再利用された。それ故、パウサニアスがアッティカを旅した頃はすでに土台を残すのみになっていたため、ポセイドン神殿をアテナ・スニアス神殿と見誤ったわけである。フォールがこの岬を訪れた1906年の時点ではこの明らかになったばかりの発掘成果は未だ一部の研究者のあいだでしか知られていなかったであろう。アテナ・スニアス神殿については J.Travlos, *Bildlexicon zur Topographie des antiken Attika*, Tübingen, 1988 pp.404-429 を参照。またパウサニアス著馬場恵二訳『ギリシア案内記』岩波文庫(1991年)の20頁の訳注及び21頁の写真と解説も参照のこと。
- (15) 当時の政党ないし派閥の名前か? 現代ギリシア史に疎い筆者には不詳。
- (16) フォールの結婚は早く、医学生時代の1896年4月9日のことであった。翌年1897年に長男フランソワが生まれ、1899年に長女エリザベート、1900年次男ジャン=ピエール、1904年次女マリー=ゼリーヌが生まれている。しかし、長女は1903年に亡くなっており、ここでフォールが「怖ろしい不幸を経験した」と語っているのはこのことを指すと思われる。
- (17) ここにフランス語で le Céphis と表記されている地名はパルネス山に源を発するケフィソス河のことであろうか。
- (18) フォールの当時9歳になっていた長男。前注16を参照。
- (19) アイスキュロスの悲劇『アガメムノン』の冒頭で物見の男が独白する一節で、6-8行に当たる部分。因みに呉茂一氏の訳(『ギリシア悲劇全集』第1巻人文書院1968年)では以下のとおり。「高空にひときわ著しく見えてかがやく大星どもの、沈む時刻も、またそいつらが昇る時刻も、みな識りわけた。」筆者がここで「王たち」と訳したのは les Dynastes。フォールは「王のごとき大きな星々」の意でこの言葉を用いているのかもしれない。

ないが、どうもアトレウス家の王たちの縁の地にやって来て彼らの栄枯盛衰、彼らの恐るべき運命に思いを至しているようなので、フォールは故意にこの言葉を用いているように思える。

(20) コリントスの遺跡のなかで最も目を惹くこの神殿はギリシア本土で最も古い神殿遺構の一つであるが、「パルテノン神殿よりも200年も古い」というフォールの言葉はパルテノン神殿建立が前447 - 432年であることを考えると大袈裟に過ぎる。現在ではこの神殿は前6世紀中頃に建立されたアポロン神殿と考えられている。38本あった円柱（正面6本、側面15本）のうち現在は7本が立った状態で見られる。

(21) デルフォイの港イテアの対岸にあるというアクラタなる地名は現在の地図（フォールは「地図を見たまえ」と妻に言っているのだが）には載っていないように思われる。手紙の文面からはパトラス、さらにはオリュンピアへ向かう鉄道の駅があるようなのだが。

(22) *OC, III* p.1147 にこの全集の編集をした、フォールの友人だったイヴ・レヴィによる編者の註としてエリー・フォールの家族構成が紹介されている。それによると、ミミの愛称で呼ばれているこの女性はフォールの妻シュザンヌ・ジラルルの姉。後の手紙からも知られるように、ミミは当時イタリアに滞在していたらしく、ナポリで再会を果たし、ローマにも一緒に訪れている。

(23) いうまでもなく「デルフォイの御者」と通称される名高いブロンズ像。1896年に発見されてから、たちまちこの像は芸術家や批評家、美術愛好家のあいだで高い評価と人気を得たようで、たとえばスペインに生まれヴェネツィアで活躍した多彩な芸術家マリア・ノ・フォルチュニイはこの像からヒントを得てプリーツを特色とする古代ギリシア風ドレスを1907年頃デザインし、「デルフォス」と名付けている。エリー・フォールはここではこの像を簡潔に賞賛しているのみだが、その後もずっと彼のお気に入りの作品だったようで、後に1924年になって彼の生まれ故郷のドルドーニュ地方に家を購入したとき、近く（の公園？）に「御者」像の複製を設置している。その複製の御者像を囲んで写したフォールとその家族の写真が *Denoël, I* p.196 に掲載されている。

(24) 1877年にドイツ考古学隊によってオリュンピアのヘラ神殿（ヘライオン）の内陣跡から発見された大理石の「幼児ディオニュソスを抱くヘルメス」像。パウサニアスが『ギリシア案内記』のなかに、「後になってヘライオンに奉納された像もある。そのなかに幼児姿のディオニュソスを抱くヘルメスの石彫神像。像はブラクシテレスの手になる」（飯尾都人訳）と述べている^{くだり}件（5巻17章3節）があり、そこから発見当時は前4世紀の後期クラシックの代表的彫刻家ブラクシテレスの原作として評判を呼んだ。その後、1927年にドイツの考古学者C.ブリュームルが大理石制作技法の観点から原作説に疑念を呈し、前2世紀の同名異人の説を唱えて以来、原作説、ローマ時代のコピー説等、現在まで議論が続いている。エリー・フォールがこの作品を見た1906年当時は当然ブラクシテレスの原作と考えられていたはずである。

(25) オリュンピアのゼウス神殿の東西破風彫刻の作者については、パウサニアスが「前面[東]の破風はトラキアのメンデ出のバイオニオス作で後部[西]のそれはアルカメネス作。

エズヴィオ山とソレント半島が見渡せ、18世紀の風景画家たちの好画題ともなった。ゲーテは『イタリア紀行』のなかで、1787年2月27日に「私たちは更に夕方ボジリポの洞窟へ出かけた」（引用は相良守峯訳）と記している。この洞窟とはアウグストゥスの開いたトンネルのことだが、このトンネルは現在は使用されていない。

(30) 「ヘラクレスのトルソ」とは、いわゆる「ベルヴェデーレのトルソ」のこと。ルネサンス時代にヴァチカーノ宮殿のベルヴェデーレの庭園に置かれ、ミケランジェロをはじめとする近世の芸術家に大きな影響を与えたことで知られる。頭部と四肢の大半を欠いた男性のトルソのみの大理石彫刻で、男が毛皮の敷物の上に坐っているため、そのたくましい肉体と相まって従来ヘラクレスを表している像と考えられることが多かった。現代では、毛皮が獅子のそれのようにも豹のそれのようにも見えるのでヘラクレスと限定することを避け、「ベルヴェデーレのトルソ」と呼び慣わしている。

(31) 「波から上がるウェヌス」とは現在「ルドヴィシの玉座」と通称されている大理石浮彫を指し、美しい「少女の像」とは1878年にアンツィオで発見されたことから「アンツィオの少女」と呼び慣わされている大理石丸彫り彫刻、また、ローマの「女性像」の傑作とは、大理石丸彫り彫刻の「ウェスタの巫女」を指すと思われる（OCの編者イヴ・レヴィの註釈 IIIp.1148を参照）。「ルドヴィシの玉座」はこれまでに何度も疑念が呈されたとはいえ、現在の研究では前5世紀前半の作品というのが定説になっている。フォールはこの作品を実見してよほど気に入ったようで、『古代美術』が改訂を重ねても図版に必ずといってよいほど載せていたようである。それでも前5世紀の作品とする通説には疑念を呈し、前1世紀の新アッティカ派の作品　ローマがギリシアを征服した後、ギリシア美術を愛好するローマ人のためにクラシック時代のギリシア作品の様式やモチーフを借りて変化を加えた作品を制作したり、模作を制作したとされるギリシアの彫刻家たちの作品ではないかと述べている（「人間の黄昏」の章の原註）。「アンツィオの少女」については、フォールはOCIに図版を載せ（pl.113）、そのキャプションにフェイディアスの時代のイオニア的作品ではないかとしているが、現在の研究では年代についてさまざまな議論がある。前3世紀のヘレニズム期の作品という考え方が一時有力だったが、近年はギリシアの原作ではなく、質のよいローマ時代のコピーとする傾向が強くなり、原作は前3世紀前半のブロンズ像だったのではないかとされている（J.J.Pollitt, *Art in the Hellenistic Age*, Cambridge, 1986, p.56; Museo Nazionale Romano, a cura di A. Giuliano, I,1,Roma, 1979,pp.186-192を参照）。なお、この少女は手に犠牲式に用いる四角い盆を持っていることから、女祭司、もしくは助祭を表した像と考えられている。「ウェスタの巫女」もOCIの「ローマ」の章に図版が載っている（pl.189）。現在この像は、彫像タイプとしてはヘラ・バルベリーニ・タイプに由来し、髪型の表現法などから2世紀後半の作と考えられている（Museo Nazionale Romano, a cura di A. Giuliano, I,1,Roma, 1979,pp.269-270を参照）。まどろむ「エリニュエスの像」もやはりOCIに図版が載せられており（pl.134）、前3世紀の作とキャプションがついている。しかしこの像は後補部分が多く、現在でも丸彫り彫刻の一部だったのか、それとも高浮彫だったのか決め手がなく、主題も

エリニュエス、メドゥーサ他さまざまな解釈がこれまで出されたが、一応のところヘレニズム時代の戦闘群像のひとつ（たとえば死せるアマゾン、ないしガラタイの女性）に基づくローマン・コピーとするのが大方の説である（Museo Nazionale Romano, a cura di A. Giuliano, I,5, Roma, 1983, pp.127-130 を参照）。前5世紀の素晴らしい「アポロンの像」とは筆者の推測するに、「テヴェレのアポロン」と通称されている大理石丸彫り彫刻だが、OCIには図版が掲載されていないので決め手がない。この作品は現在では、フェイディアスの原作に基づくローマン・コピーとされている（Museo Nazionale Romano, a cura di A. Giuliano, I,1, Roma, 1979, pp.208-131; J. Boardman, Greek Sculpture- the Classical period, London, 1985, p.87 を参照）。フォールはこのローマ国立博物館で初めて見て感動した「ルドヴィシの玉座」、「アンツィオの少女」、「エリニュエス」、「ウェスタの巫女」をこの時以来忘れられない愛着のある作品として図版に組み入れていたようだが、国書刊行会から出版される拙訳『古代美術』では、上記のように年代、主題等問題作であり、読者に誤解を生むことを危惧して、「ルドヴィシの玉座」を除いて図版には入れなかった。フォールの書簡を筆者が読んだのは「あとがき」を書く段階に至った時であったが、その時はすでに図版の編成をし直す時間がもはやなく、削除したままにせざるを得なかった。しかしフォールが彼の最初の「グランド・ツアー」で感動しこのように愛着を持っていたことが明らかになってみると、図版削除は筆者の早計、独断に過ぎる行為だったと反省している。

- (32) このベラスケスの作品は現在ドーリア・パンフィーリ美術館にある「インノケンティウス10世の肖像」。エリー・フォールは若い頃からベラスケスを好み、1903年にLaurens社からLes grands artistes, leur vie, leur oeuvre 双書の一冊としての『ベラスケス』に解説を書いている。
- (33) ピサのカンポ・サント（13世紀末に完成された墓所で、中庭を囲む長方形のゴシック建築）には、回廊壁面を飾る「死の勝利」の大壁画（13世紀後半）とともに、15世紀後半に主としてフィレンツェで活躍したペノツォ・ゴッツォーリ（1421年頃 - 1497年）の手になる旧約聖書に取材した壁画があった。これらの壁画は第2次世界大戦で焼け落ちたが、長期にわたる修復によって一部救済された。